

十日町市まちなかステージづくり の取組みについて

中川 直也¹・小野塚 裕一¹

¹新潟県 十日町市 建設部 都市計画課 (〒948-8501 新潟県十日町市千歳町3丁目3番地)

十日町市中心市街地活性化基本計画（2013年6月28日認定）の目標である「活動する人を増やす」「訪れる人を増やす」のために、市民活動と交流を促進させる二つの拠点施設を都市再生整備計画事業（地方都市リノベーション事業）により整備した。両施設を総称して「まちなかステージ」と呼び、構想段階から使い手である市民と一緒にワークショップを重ね、計画づくりを行った。さらに実施設計や工事段階においても、市民や活動団体からの意見を取り入れながら整備を行った。

本稿は、従来にない公共建築の整備手法を行ったことにより、完成後も多くの市民や活動団体が利用する「まちなかステージづくり」の取組みについて紹介する。

キーワード 中心市街地活性化、まちなかステージ、市民活動、協働

1. 十日町市の概要

十日町市は、新潟県の南部に位置し、中央部を日本一の大河信濃川が南北に流れ、十日町盆地とともに雄大な河岸段丘が形成されている。総面積は590.39km²で、その約70%を山林・原野が占めている。毎年の平均積雪量が2mを超える国内有数の豪雪地帯であり、年間降水量の約半分が12月から3月に集中している。また、1年の3分の1が根雪期間となり、冬期間における市民の日常生活、経済活動に大きな影響を及ぼしている。

本市は、2005年4月1日に旧十日町市、川西町、中里村、松代町及び松之山町の5市町村が新設合併して誕生し、現在の人口は54,380人（2017年8月末）である。

2. 十日町市中心市街地活性化基本計画事業

1975年代までの中心市街地（以下「まちなか」という。）は、当時隆盛であった織物産業にけん引される形で市民経済が発展し、活気にあふれ、にぎわいがあった。（写真-1）しかし、21世紀に入り、低成長、人口減少時代に突入し、にぎわいが失われつつあった。そこで、十日町市本来の強みである市民の「つながり力」や「市民活動」といった社会的な資本を活かし、かつて織物産業で活気があった頃とは異なる「新たなにぎわい」を生み出すために、2010年12月に十日町市中心市街地活性化基

本計画（以下「基本計画」という。）の策定に着手し、2013年6月に国の認定を受けた。

そして、基本計画に登載したコア事業を都市再生整備計画事業（地方都市リノベーション事業）にて、5ヶ年計画で整備を行うこととした。



写真-1 織物工場で働く様子（1965年代）

3. まちなかステージづくり

(1) まちなかステージづくりとは？

まちなかをステージ（舞台）に見立て、市民が共に楽しい活動を実践（上演）していく場を「まちなかステージ」と位置付けた。

その拠点となる市民活動と交流のための施設「市民活動センター」及び「市民交流センター」（以下「施設」という。）を整備する上で、構想段階から使い手である市民と一緒にワークショップを重ね、計画づくりを行った。さらに実施設計や工事段階においても、市民や活動団体からの意見を取り入れてきた。この取組みが「まちなかステージづくり」であり、施設の総称となったので

ある。

(2) まちなかステージづくりのきっかけ

きっかけは、地元の建築士会中魚沼支部青年委員会の有志5人グループ（のちのstudio*H5（スタジオエチゴ））の発意である。

市は、2011年9月に基本計画の第1次骨子を策定し、目標の「活動する人を増やす」「訪れる人を増やす」のために市民活動と交流のための拠点施設整備事業を掲載したが、整備方針や手法を模索していた。同時期、建築士会中魚沼支部青年委員会の有志5人グループは、まちなかのにぎわいが失われつつあることに、何かできることがないかと思案中であった。そうした中、テレビ番組「情熱大陸」に出演していたコミュニティデザイナー山崎亮氏（㈱studio-L代表）の放送を視聴し、コミュニティデザインの取組みを知った。

2012年1月に新潟県内で山崎亮氏の講演会があることを知った建築士会中魚沼支部青年委員会の有志5人グループは、市担当者を誘い講演を聴いた。そして、講演内容に強い感銘を受け、山崎亮氏の宿泊先に押し掛けて十日町市での講演をお願いした。

2012年4月に新潟県建築士会中魚沼支部の主催による山崎亮氏の講演会「コミュニティデザイン～人と人をつなげる仕事～」が開催され、市民の関心が高く251名の参加があった。これを機に建築士会中魚沼支部青年委員会の有志5人は、studio*H5（スタジオエチゴ）というユニットを結成し、住民主体のまちづくりをテーマに活動を開始し、後のまちなかステージづくりに参画する一員となる。

2013年8月、市民活動センター等の整備に係る活用計画策定業務プロポーザルにより、㈱studio-Lに決定し、まちなかステージづくりの取組みがスタートした。

(3) 市民主体の計画づくり

一般的なまちづくりの市民ワークショップでは、将来像について意見交換を行うが、その先の具体的な活動を実現する主体が明確では無いことが多い。しかし、このまちなかステージづくりでは、その先の将来像を現実のものにするため、市民自身の主体的な活動につながるように3年間のプログラムを作った。

(4) プロジェクト1年目（2013年）

市民自らが、まちなかのにぎわいについて考え、それを実現するための力をもつ「まちの担い手」を育成するために、デザインやファシリテーション技術を取得するための「デザイン勉強会」を開催した。まちなかで楽しく活動するためのコンセプトをワークショップにより、「まちなかコンセプトブック」にまとめた。また、次年度の施設設計者を選定するためのプロポーザル要綱を市民が主体となり作成した。（図-1）（写真-2）

H25年度 プロジェクトの流れ 1年目

・市民有志によるハード・ソフトに関するデザインやファシリテーション技術の勉強会を実施しました
・まちなかで活動する上でのコンセプトをワークショップで検討しました

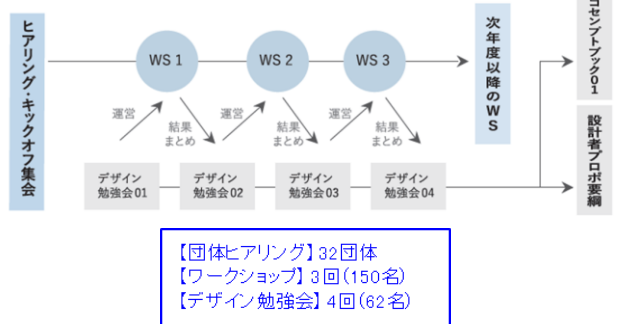


図-1 プロジェクトの流れ



写真-2 ワークショップの様子

(5) まちなかでの活動コンセプト

十日町市は四季折々の伝統行事や習慣を楽しむことが根付いているまちだが、市民がまちなかで楽しむことが少なくなっていた。日常的にまちなかで楽しみをつくりだし、これからも楽しみながら十日町市で住み続けたいというワークショップ参加者の思いから、「まちなかで楽しむ。それがまちを変える。」をまちなかでの活動コンセプトとした。（写真-3）



写真-3 コンセプトブック

(6) プロジェクト2年目（2014年）

a) 設計者選定公開プレゼンテーション

まちなかステージの拠点となる「市民活動センター」は市が取得した民間空きビルを、「市民交流センター」は市分庁舎の1階及び2階をリノベーションする計画である。

設計者を選定するためのプロポーザルでは、基本計画に搭載した目標「活動する人を増やす」「訪れる人を増やす」を実現するために、①施設の使い手である市民の主体性を反映させること、②「まちなかコンセプトブック」を最大限考慮すること、③市民ワークショップ参加者・団体との意見交換の場を十分に設けて情報を共有す

ることの3点を審査のポイントとした。

2014年4月に市民活動センター等の整備に係る実施設計等業務プロポーザルを公募し、99社の応募の中から第1次書類審査で6社を選定した。同年6月の第2次審査の「公開プレゼンテーション」では、市民の意見を取り入れるため、審査員長を(株)オープン・エーの馬場正尊氏とし、(株)studio-Lの山崎亮氏、市民代表4名、行政4名による10名で審査を行い、(株)青木淳建築計画事務所（以下「設計事務所」という。）に決定した。（写真-4）

審査員長のコメント：「青木さんのプレゼンテーションは、終始、審査委員や市民に対し語りかけるように説明し、そしてあえて具体的なデザインの提案を抑え、いかなる方法で市民が空間に関わるのかという視点が語られていた。みなさんと一緒に、地元の設計者や参画者と組んで進めたいというフレーズが、地域の人々の気持ちを掴んでいた。」



写真4 設計者（左）審査員（右）

b) 3部会制の計画づくり

設計者が決定し、「まちなかコンセプトブック」を指針として、まちなかでの活動を考え実践する「カツドウ部」、そのためにあるべき施設の検討を行い設計者と協議を行う「カタチ部」、市民が使い易い施設となるための運営計画を検討する「シクミ部」の3部会制で検討を進めた。会議は「デザイン勉強会」メンバーが、「En+Design（エンデザイン）」というチーム名で、会議の進行や意見の取りまとめを行い、施設運営計画及び改修計画を立案した。（図-2,3）

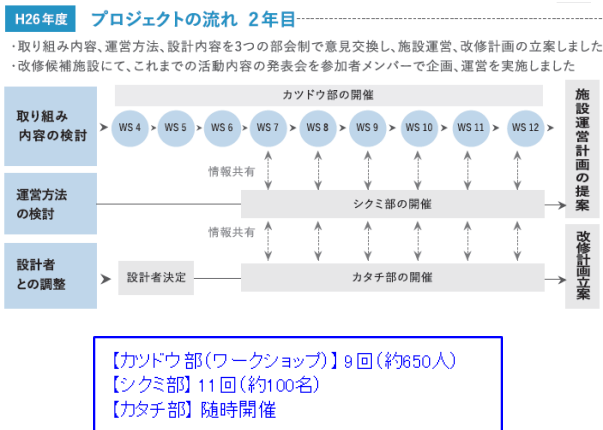


図2 プロジェクトの流れ

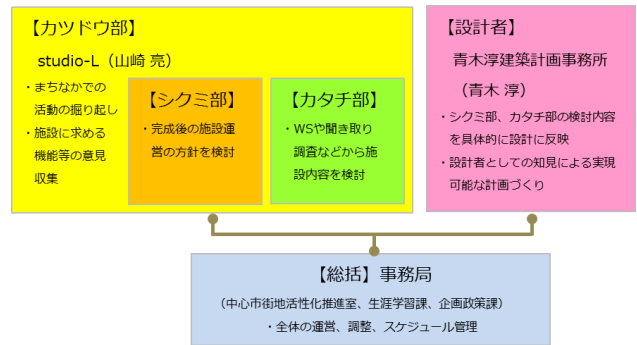


図3 プロジェクトの構成

c) 設計事務所の十日町分室（ブンシツ）

設計事務所は、設計段階から現場常駐の比重を高めるため、まちなかの空き店舗をstudio*H5と一緒にリノベーションし、十日町分室を開設した。分室には設計事務所スタッフ2名が常駐し、市民の意見を設計に反映させて行くことを続けた。分室は会議、ワークショップ、市民活動をする場所として使われるようになり、市役所の分室、地域の人にとっての分室となり、やがて「ブンシツ」と呼ばれるようになった。（写真-5）

2014年10月末で基本計画がまとまり、設計事務所スタッフ2名は東京事務所に戻り、実施設計に着手する。ブンシツは地域の人たちの要望により、市民が自主的に管理・運営することになり、地域の拠点として一人歩きを始めた。



写真5 ブンシツの様子

(7) プロジェクト3年目（2015年）

a) まちなかステージ応援団の誕生

2016年施設オープンに向けて、これまでのワークショップに参加してきたメンバーを中心に「まちなかステージ応援団」という団体が結成され、市民向けにこれまでの活動内容を紹介する報告会を実施し、考えてきた活動をまちなかで実践した。また、オープン後の施設運営スタッフに対して、コーディネーター育成の研修を行った。（図-4）

3年間のまちなかステージづくりの取組みをまとめた「コンセプトブック02」を作成し、施設運営後の活動を広げていくためのツールとした。（写真-6）

H27年度 プロジェクトの流れ 3年目

・運営開始に向けた報告会や運営後のロードマップの作成をしました
 ・運営開始後に各種市民活動プログラムのコーディネートする人材を選出し、育成しました

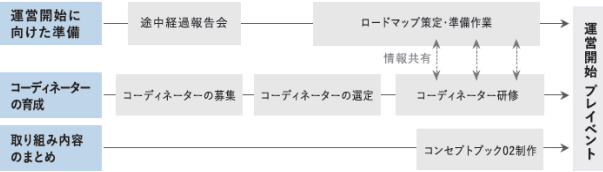


図-4 プロジェクトの流れ



写真-6 コンセプトブック02

b) 現場事務所を「ブンシツ2」に

2015年6月、施設の整備工事が着手されるタイミングで、空き店舗を改修した「ブンシツ」を閉鎖し、工事施工者の協力により現場事務所の1階を「ブンシツ2」として開設した。工事期間中も市民の意見を取り入れる場、市民が活動する場として利用されて行くことになる。(写真-7)

ブンシツは、「設計(カタチ)と活動(ナカミ)が並走していく場所」となり、施設の完成前から活動が発展していき、設計には多くの活動イメージが反映された。



写真-7 ブンシツ2の様子

c) 建物ワークショップ

市民が使い易い施設にするため、「日曜大工教室」ワークショップを開催し、施設の間仕切りなどを使い手となる市民と一緒に考案し試作した。それらの仕組みは施設の機能として組み込まれた。(写真-8)

また、市民も施設の工事に関わる機会づくりとして、「泥団子づくり」ワークショップを開催し、国宝火焰型土器を展示できる文化歴史コーナーの土壁となる「どろだんご」を市民の手でつくり上げた。(写真-9)



写真-8 日曜大工教室の様子

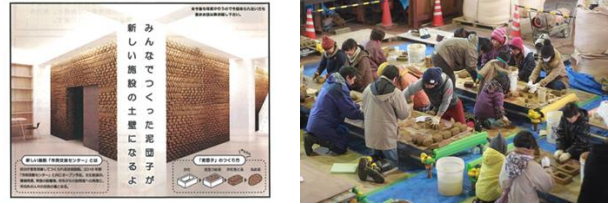


写真-9 泥団子づくりの様子

d) 「十日町サッシ」の開発

地元業者と共同で、地産材を活用したオリジナルの木製建具「十日町サッシ」を開発し、施設に取り入れることで、街並みづくりや地域産業に寄与するサイクルを生み出した。(図-5)

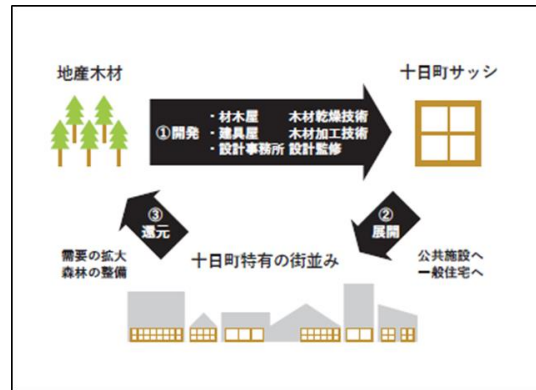


図-5 十日町サッシの産業サイクル

e) ブンシツから始まった活動

ブンシツは完成した施設で展開される市民活動の予行演習の場所として活用され、子育て主婦層を中心とした「まちなかダンス部」、ひきこもりの人たちが主催する「ものづくり教室」、地元の芸術家や研究者らの活動発表と地元の手料理を組み合わせ「まちなか晩ごはん」、読書会を開催する「000(オルト)」、着物をリメイクする「まちなか手芸部」などの新たな活動が始まる。

その中の「まちなかダンス部」は、数人で始めた小さな活動が、大勢集まるグループに拡大していき、まちなかの行事で地域を活気づける団体へ発展した。(写真-10)



写真-10 活動の様子

f) 施設の名「分じろう」「十じろう」

二つの施設が市民に長く愛され、親しんで利用してもらうため、愛称を募集した。(株)青木淳建築計画事務所の青木淳氏、(株)studio-Lの山崎亮氏から審査をして頂き、応募数251通の中から愛称が決定した。(表-1)

表-1 施設の名

施設	十日町市市民交流センター	十日町市市民活動センター
愛称	分じろう	十じろう
解説	旧本町分庁舎であり、本町2丁目に所在する施設として命名	通称センタークロス、いわゆる十字路のそばにある施設として命名

4. 施設の概要

(1) 十日町市市民交流センター「愛称：分じろう」

「地元内外の人々への「発信」と「交流」を想定した施設」をコンセプトとし、1階は国宝火焰型土器の展示などまちの文化や歴史の「発信」の場となっており、2階は「和の空間」として露地のように土間廊下がめぐり、和室や茶室が和のおもてなしによる「交流」の場となっている。(写真-11,12)

所在地：新潟県十日町市本町二丁目226番地1
敷地面積：1,117.94㎡
延床面積：1,876.71㎡
構造：鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
階数：地上5階
総事業費：316百万円



写真-11 施設の外観



写真-12 施設の様子

(2) 十日町市市民活動センター「愛称：十じろう」

「地元の人々の「活動」と「創作」のための施設」をコンセプトとし、1階は多目的に利用可能なギャラリーがあり、「創作」した物の展示や「活動」に気軽に触れられる空間を担っている。2階は談話、読書、打ち合わせなど、人数、目的に応じた使用が可能になっており、ワークショップでの意見を元にデザインされた間仕切で仕切られている。そして3階には創作スペース、作業スペースなど「創作」に特化した場となっている。(写真-13,14)

所在地：新潟県十日町市本町三丁目6番地4
敷地面積：381.48㎡
延床面積：821.11㎡
構造：鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
階数：地上4階
総事業費：421百万円



写真-13 施設の外観



写真-14 施設の様子

5. 施設オープンとその後

(1) オープン準備月間

2016年4月にまちなかステージ竣工式を開催し、6月の貸館開始に向けて、5月をオープン準備月間とした。この期間中に様々なイベントを開催しながら、市民向けに

施設の使い方の提案を行った。82団体による17イベントが行われ、約2,700人の利用があり市民の関心度が高かった。(写真-15)



写真-15 オープン準備月間イベントの様子

(2) 2016グッドデザイン・ベスト100

青木淳建築計画事務所と十日町まちなかステージ応援団による「ブンシツ」及び十日町まちなかステージ応援団の活動は、公共施設設計における協働の取組みとして、2016年度グッドデザイン賞を受賞した。また、受賞した1,229件の中から特筆して優れているとして、「グッドデザイン・ベスト100」に選ばれた。(写真-16,17)

審査委員の評価：「プロジェクト前半のワークショップと、後半の建築設計とが、ブンシツという仕組みによってうまくつながっている点が評価できる。その結果、対象となる建築空間が生まれた後も人々の活動が継続することになっているといえよう。」



写真-16 ブンシツと十日町まちなかステージ応援団



写真-17 グッドデザイン授賞式の様子

(3) 利用状況

まちなかステージの2016年6月から2017年3月までの利用者は49,107人、利用団体は延べ765団体であった。また、公民館利用団体と重複しない新規登録団体は82団体あり、この二つの施設を中心として新たな市民活動が始まっていると言える。

(4) 基本計画の目標値達成

基本計画の目標「活動する人を増やす」ための市民活動センター整備による増加目標値は、14,413人/年である。2016年度の10ヶ月の利用実績は17,906人/年となり、目標を達成した。(図-6)

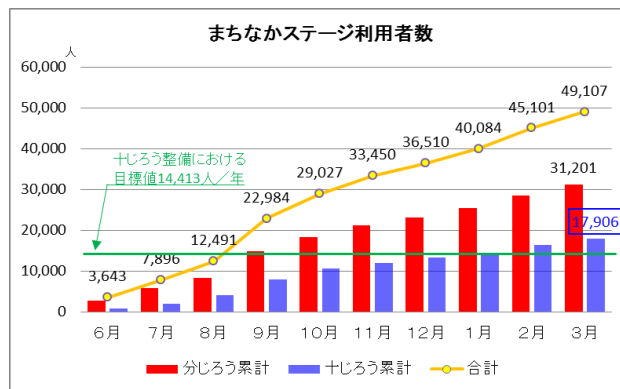


図-6 まちなかステージの利用者数

6. まとめ

2013年から始めた3年間のまちなかステージづくりは、施設完成後に市民主体の自主的な活動が活発に展開される仕組みづくりを目的とした取組みである。まちなかのステージ(舞台)で楽しい活動を実践(上演)していくためのコンセプトづくり、新たな拠点となる施設のデザインや運営の検討、そして、まちなかでの具体的な活動を考えそれを実践した。ワークショップのメンバーを中心に「まちなかステージ応援団」が結成され、地域の拠点となっていた「ブンシツ」からは、様々な活動団体が生まれた。施設が完成するまでの間、「ブンシツ」が市民活動の予行演習の場所となることで、完成後のまちなかステージ「ぶんじろう」「じじろう」は、自然な形で市民活動が展開される舞台となった。

こうして、2016年6月にオープンしたまちなかステージは、大勢の方から利用され、愛される施設となり、基本計画の目標「活動する人を増やす」目標値を大きく上回ることができた。

7. おわりに

まちなかステージ「ぶんじろう」「じじろう」がオープンし、まちなかで楽しむ活動が増えてきた。今後は、まちなかの活動団体のほか、周辺部の団体からもまちなかで活動してもらう機会を増やし、「まちなかのにぎわい」が「周辺部のにぎわい」に波及し、「十日町市全体がにぎわうこと」を期待している。これからが本当のまちなかステージづくりである。

最後に、まちなかステージづくりに関わり、ご協力いただいた大勢の方に感謝申し上げ、これからも「まちなかで楽しむ。それがまちを変える。」を合言葉に、まちなかのステージ(舞台)で楽しい活動を実践(上演)してもらいたい。